



時  
雨  
會





二時 卯辰 卯辰

春 純日

辰之

文政九丙戌十月十二日於義仲寺無行

百約

東蒼

春の字やーくれのくらあつく

まきも世いううまわらぬの冬

さくさくハハはそくを海に産産て

松うささくうい裾やくまたく

小糸の尻のあつまはるふ居成りに

玄糸とりの朱粉似あふ

采高

舒六

九鼻

きく位

采友



朝魚ハ葎トありて存の月

宇洋

きぬとも惜て五位のそと

岸溪

釣とての沙真をもちこむ程を味

う差

水ととりへの雨久は小をむ

二量

虫の這あすはし糸く、大争乞

サ福

セウ下道ハ賣ぬめらまら

二薑

人老まよして小口まきく男

還古

あゝ氣多き虫らゆふは

止水

玉すきれあてやうと一を返り

蕙市

おまのあきてやかきまの

汲波

とろとろき破せを月をたの

佐鶴

冬の園やう似母の

冬舟

九十日あろせに琵琶を弾

斜月

ねんく佛のきく

馬田

大綱の信山とまき

と参

家右虫のまき

古搦

白鷺ふらふつあつ

一頂

二代つらき

月車



孫とくも妹の赤姓とてつとるは  
 しのよとつとるはまきし神聖  
 ちつけいしつとるは小ぬきとつとるは  
 人まめつとるはつとるは  
 あんくとつとるはつとるは  
 まつとるはつとるはつとるは  
 つつとるはつとるはつとるは  
 こつとるはつとるはつとるは  
 隈もふく月つとるはつとるは

和月  
 仙楽  
 几頂  
 吐缸  
 殊格  
 宗阿  
 旭舟

ねとつとるはつとるはつとるは  
 ちつとるはつとるはつとるは  
 つつとるはつとるはつとるは  
 十とつとるはつとるはつとるは  
 つとるはつとるはつとるは  
 是代のつとるはつとるは  
 親せつとるはつとるはつとるは  
 松つとるはつとるはつとるは  
 體のつとるはつとるはつとるは

得意  
 多雅  
 儿乙  
 于當  
 且高  
 杜蓼  
 布重  
 風也



今買し牛の吼もかハ甘くて 李喬  
色もどろけ去人形出尻 菊川  
下の白よとそそこのひさる存の家 句佛  
あす不のすしき吹もれたり 一葉

出席  
一頃下

はらあそとくかくとくは可る 舒六  
せうとほとたれて塚のひらき 菊住  
神志くれあはるまの一夜が 九臯

りあは是につもあつあつは  
とくこくろはひらつるまはれハ

像のまへにこれも消るつらせり 句佛  
くまくれしてハは言をてこ山 且高

あまをともく

少はハくそ自く庵まのかれ紫 浮翠  
新言しとくまこの月のありれま 得處  
憤の樹のつゆもつとく夕時雨 風也  
りてそくそとれに翁た月 杜養



去々々中極まさ〜〜〜南赤ま 三三女

片々々一極入んて時白りり 号雅

ととと或るや〜〜〜清くまらる時る 世量

最一ととい時るて極の軽口を幸 凡乙

極〜〜ね松の世々々や神時く日 布雪

く〜とととを是る〜 青根 殊極

冬日お融まり〜〜舟川う赤 聖田 旭舟

志々々や日のお〜山〜川〜せて 坂本 干當

松〜〜〜松のまをと金所〜 何樂

れら〜〜辰朝の生染去々れらま 和序

さげ月の去々れ〜〜や雜末山 志守女

まの葉乃〜まよりかろ〜〜神時白 丹南

くまんとす時雨人ま〜まの言 志守女

流葉のいろや〜〜れのおあめ 志守女

後ハは〜〜な小をよりや時白の言 斜月

去々々や笑人の水ま〜まろ〜〜と 一頂

口のれり〜山のこと〜〜〜〜時る 李守女

翁志や茶の葉あんと折てまろ〜

〜



とくくやけりこしき栗津也

大は申す由

まくれよしり人の来てしりれり

古積

んて君の山の麓むまくれ中

宇洋

ほくき尻等しとよりけり危

止水

まくれまろくく危く大系馬

毎隔

さくしほく山とくくやけり危

吐缸

結着附のこるハ笑影やうりけり

几頂

とろ月に似合しきわくしけり

兼川

相の末ハ丸のこくく我美しり

一紫

をハ交実本ハのりてまくれ危

馬田

下やまの尻しりれり合はる上

呉潮

まくれやけりれのこる峰の松

是古

りあの目をむくもぬくしけり

汲波

まくれやけりしりれり家の元

と参

後館ふまをるこくくしけり

采友

まよりりハこしききやけり

り系

中にりまのりけりやうりし

采高



奉納

一こより遊ハ志々れて夕て〜  
 去々〜  
 山の根や日ハありふ〜  
 親子〜  
 寂子〜  
 宇治ま〜  
 去々梅や志〜  
 神中〜

イカ 雨竹  
 香山 輦 汐  
 井木  
 桃 溪  
 其 然  
 蕉 舎  
 貫 志  
 一 醉

あ〜  
 夕中ハち〜  
 大根の〜  
 松原に〜  
 枯枝や〜  
 あ〜  
 去々や〜  
 晴あ〜

素 暁  
 暁 枝  
 貴 風  
 剛 房  
 右 文  
 燕 市  
 花 畑  
 花 峯  
 生 花



けくわつまろほりきぬるの目 蛙声

雨にありておろする萩の枯葉ナハリ 丸松

ぬき掃につくや雀のあしイヒ 中石

しづれてうらまゝありて是菜の物 團釈

枯てしつゝ名ハかたうらまゝ母の屋を 番民

馬おろしたるやこままの鞍あり 雀叟

降くそめしきまゝそそく初の花 舟立

涙をのこつて越る去くれうらま 寺樓

とくきのうけてぬいほま末 眠山

夕あしづ波の小山をくられし 春舟

あきおろす笛ハ後うらまゝ去るは 白洗

松風の中によろあしづられし 棠瓜

杉のしづや修きけの目まをくし 梅屋

世糸の火に草やうらまをけむらり 猪吹

去くしづや杉のまをくし山に結 蕨草

松風のしづれきの日あしづられし 坐籠

おろしづのけむらるゝあしづられし 井里

竹垣のしづらハ枯葉の目うけし 権巳



を月のちうくに倒に葎くふ

普品

素肉老のちうくにや池のどし

天口

ほろくふさや木の葉乃るふあ

自篤

煉るきを二朝かやう藤筑くふ

角抄

一夜くれはふーこのつくや孫会

昌作

赤布ハふふ山より所く

四溪

旅人も月しちうきー梅の表

梅間

丹ハ居のほとうーさより雪停ふ

庭雅

孫はてらふはうーゆー火相が

五道

宋の戸やふにあちたのさうあく

鳳巻

村に入て水のよき

沙鷗

丹毛の裏あまてちうき

而后

候はあやあま子解

丹庭

まの月や丹にまきの一日風

赤竟

ほろくふさや木の葉乃るふあ

得芝

まの月や丹にまきの一日風

鳥川

嵐をてまけハ掃ふむ

卓池

赤野のや丹ハぬまてま松の

松溪







雪のちりさるにまぶし小六月 其杖

冬木之賣りりちりさきあつて 丹鶴

木くくくやを名居のけきの殺き馬 小高

すかえに飾るをきやしとる門 内之子

給るまの棒よ日のさけ小本を 雪鳩

くれちりき風や枯葉を上にをる 丹場

細の身にうく風吹や細流雪 只の

表の所に角かきをあり除夜の意 湯屋

志くくや中に一むきとるり 睡堂

歌を棒のおちてあきあき 枯尾と 乙 魏

足くくく空に日のあき 枯葉と 依 瓜

とくくくや小海屋をくくくあき 菅屋

料理切つて入て遣入おちてを 枯雪

日ハ西に短きあきのかれき 武 陵

くんでけやをくくく二ツ家むとり 竹 崖

麻売のきくくく雪のふりさうふ 豊 雀

六くくくに向少やくくくき 箕 舟

葉のあきくくくあきあり風の音 七 舟



一ちまのくけもありのふく山 吐雪  
社築の遊まにさある夜が 洪夕  
雪の厚し結 傘もさゆあり <sup>タニコ</sup> 巖  
瓶ノ水隣の雪乃うつり急 万頼  
積る雪まきくおまに五六寸 北窠  
静ふりあやあくしてかれ尾毛 芝計  
冬とーるま言のむらお <sup>タチマ</sup> 蕨  
降くくけてあやあやりの雪の大 <sup>ハリマ</sup> 六英  
冬ふくとる山他ーかれをくれ 古谷

本くまー早も縁も誘ふえ 其松  
冬さーのゆくのち八つりか 松英  
あゝ古塚とくいて  
まきゆて尾毛もかゝる古英さほ  
あゝあけぬも子まほまおか  
降くれて餘小すりりあゝゆ日 松  
ゆのまきえて新まゝ隊ゆあか 布蟬  
まくれーてほ社さむー非を月 浦月  
ゆるまやせめて現まづうあゆく <sup>ヒセニ</sup> 八歩



志々れんや冬もあはるの朝ハ  
紅く女  
冬の日何の鳥もふく雪にりり  
曙山

粟津のうき式をあまひ

あはれもあはる志々れんや日  
徳玉  
あまれハ松も吹く  
左山  
あまのち松見つけ  
鳥の意  
あまの障を  
棹哥  
あまにこく柳も柳かれ尾  
投瓜  
あまの人よあはれ  
小妻うふ  
柳枝

あはれやいふその松を  
汀毎  
あはれ戸をあまやこまきの懐  
未粧  
あはれもあはるにありぬ冬もあま  
素策  
あはれ屋の唄にこあまもあま  
指代  
あはれよあまにこあまもあま  
静居  
あはれやあまにこあまもあま  
雪鳩  
あはれもあまにこあまもあま  
陽里  
あまの松もあまにこあまもあま  
南洋  
あまのうきあまにこあまもあま  
冬是月



赤れよき人ちしほまのありしゆり玉 古夕  
 小菖ふき雪や歌りしゆを傳 凡隅  
 どのの氣はいふてとてとて他の言 <sup>アキ</sup> 言蛙  
 けく今や風のききも膝ふしり <sup>周防</sup> 雪香  
 こころいしや梅はいしりもささ支度 愚節  
 けり今や活や活華の支度 葵汀  
 卯ふさきて唯耳をきき松の風 貞雄  
 月ありふししけるの夜ありしり 静史  
 本くの雪蝶もゆき舞やとて <sup>了ハ</sup> 茂推

こそさあや志也うやせしおあ <sup>サ又キ</sup> 葉陵子  
 木の葉はゆきにまきまきありしゆ 雪蝶  
 花ありし竹割夜のし <sup>今</sup> 今是  
 三日月や志くれのありし <sup>必</sup> 必雀  
 いそぐしき雪のかしつきや <sup>松</sup> 松清  
 昔より冬をかきく朝 <sup>玉</sup> 玉淵  
 冬木まじりし <sup>ナリセ</sup> 素言  
 まじりてあき茶のむの <sup>窓</sup> 窓菱  
 冊をきてけるの人と <sup>窓</sup> 窓菱



本うししや人あよるえーしや砂子 聴雨

表時日の二度めに修き約瓶千クコ 表

登るのふふ水争のけさう中 葺村

露忌ハのちたのーころ月あふ 响之

松うき松う糸乃志れう春 足馬

少ーおむ神ハ何毒の勝るうあ 丈力

考の痛の増よりこむにーくれけ 控袖

月のさけ産政のうねま十枚り 雲丸

河考や一雪にぬまー一在る交 与成

多う松とててうくーりれ信うむ ナニハ 寄洞

あふふしに休むあまあり船の重 井眉

吹うとにあきんりーやあ提 公路

雪ううや石取百歩のまどい水 較足

傾きー一月登ふあ本のを水 嗽石

灰買のうーろうーまをまきさび 子鶴

雪りのけーしーせのけりうあ 一肖

人の希乃短ハまにと毛相火桶 云氷

るの岸をむまへハとけく小雲田 呉光



戸のまはりききしうあつとねの雪 一扇  
 雪に乳をのこしおねえや年の雪 スニ 西月  
 雪の戸を射しやあふきのまのま 塚 蕪音  
 うつふきこもつてうきあつとねの雪 フニ 月地  
 雪に尾をかれりあつとねの雪 字 一 詠  
 志くれよりあつとねの雪 洛 蒼乳  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 洛 世南  
 志くれよりあつとねの雪 洛 世南  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 十丈

松多き、傾てもあつとねの雪 株堂  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 金菜  
 あつとねのまはりききしうあつとねの雪 貨傑  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 卦竜  
 あつとねのまはりききしうあつとねの雪 傑子  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 芳英  
 あつとねのまはりききしうあつとねの雪 約ま文 兆三  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 梅下  
 雪のまはりききしうあつとねの雪 米海



日の園ハ早ク 栗田ハ志々れり  
 白をまてけに 房りりり雪の冬  
 頂テの秋ク 豊をえんよ光その月  
 山里の丸入 ときをさるるりり  
 雲々あハるその ずあハるあハる  
 本くししや 何をいこのあハる  
 神守のとも たりきまの柳を  
 枯いときし してあハるあハる  
 炭の息にあき 曇もくくえん

袋美 眠春 凡鳥 如水 乙雅 よく女 白絲女 色風 樗全

おしきしきの 雪と小糸女さしりり  
 河原の月や 菘鉄る川の肉  
 日のくれや 時るにぬえてまらぬ  
 つくくと 稲株をいりりりり  
 廣はや 海あけらるし様第  
 神の祈りとも 人もあハるあハる  
 湖のきりり くにけりりりり  
 十月やあハる 日ハ光のあハるあハる  
 又月原の 雪をいりりりりり

仲秀 蕨山 其成 盛季 梅價 九野 月夜 巫山 嵐景

とに云川  
今代  
甲は如  
スハラ



之條の湖よりいへししづみき  
 志らくしや目ありしの跡より一枚  
 月のあふかきくくぬや初なる  
 木くししきれてきくぬの糸  
 ぬくほくぬきて甚ゆる時日く  
 破隙や時をいたけい年ころの本  
 人のたまきききき夜のちたま  
 梓のまの市のまきき志らくあ  
 らせにききりきも移越ちきりき  
 栗三

カ、ミ山 宗松

町家 草丈

士 明

士山 暮枝

虚白

神月

心中

素律

衆のまに極みけきききききき  
 志らくしや年くおふし山より  
 日鏡やあきききききき田のくし  
 くらほきき田あの日の水きき  
 くらしききききき伊吹をたた  
 門田く時のかききき木守りき  
 暮ききききききききききき  
 松くきききききききききき  
 陸持ハぬききききききき

鈴一

風兮

嵐芝

虎心

三笑

冬生

瓢水

若松











涼しさをやうな毛豚の列を水 ナカヤ 武貫

草の色起し人もさき定し エチ川 二桂

よーあーの終もゆる二百十口 イッモ 清

夕月のまを乳房の子苗うふ 十二 我雪

五月雨のゆるあまゆる鈴子の声 カ 小崖

一司 イッシ  
由基 ユキ

取柄

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓



